



### ★最新介護医療情報★

#### A Iで胃がん治療判断支援 高精度達成、年内実用化へ (共同通信社 2024. 4. 25 配信)

岡山大と両備システムズ(岡山市)は24日、**胃がんの進行度合いを判断する材料の一つである「深達度」を、人工知能(AI)で診断できるシステムを開発したと発表した。**専門医を上回る精度での診断が可能で、患者への負担が重い外科手術の必要性をより正しく判断できると期待される。既に医療機器として製造販売承認を取得、年内の販売開始を目指す。

岡山大などによると、胃がんの治療では、比較的早期には内視鏡でのがん切除が行われ、進行した場合は開腹して胃の切除を伴う外科的治療を実施する。がんが胃の粘膜にどれほど深く入り込んでいるかによって治療が決まるが、深さの判別は専門医でも難しい。内視鏡治療で治る症例に外科手術が行われたり、逆に内視鏡治療では不十分だったりする症例があり、課題となっていた。

システムでは、さまざまな深達度の患者約500人分の内視鏡画像約5千枚を「浅い」「深い」の2種類に分類してAIに学習させた。その結果、**専門医による正答率を10ポイント上回る82%の精度を達成。診断にかかる時間も1分弱だという。**

岡山大の河原祥朗(かわはら・よしろう)教授(消化器内視鏡学)は、システムの活用で「患者のQOL(生活の質)を損なう治療をできるだけ減らせる」と話した。今後、90%まで精度を高めたいとしている。

#### デング熱感染が急拡大 アルゼンチンやブラジル (共同通信社 2024. 4. 19 配信)

【メキシコ市ロイター＝共同】世界保健機関(WHO)の米州事務局である汎米(はんべい)保健機構(PAHO)は18日、**今年1月以来の南北米大陸でのデング熱感染者が520万人を突破し、3月下旬時点の350万人から48%増加したと発表した。**

**死者数も1800人を超えて先月下旬時点の1千人から急増しており、PAHO当局者は「非常事態に直面している」と指摘した。**

デング熱による影響が最も大きいのはアルゼンチンとブラジルだが、一方で当局者は、両国ではここ数週間に事態の安定化や感染者減少の兆しがみられるとしている。

#### マダニが媒介 60代女性2人に発熱・おう吐、目まいの症状 ウイルス感染症、 今年初確認 鹿児島県「草むらに注意を」 (南日本新聞 2024. 4. 16 配信)

鹿児島県は15日、**マダニが媒介するウイルス感染症「重症熱性血小板減少症候群(SFTS)」**に、肝属郡と薩摩郡の60代女性が感染したと発表した。県内での感染確認は今年初めて。

県感染症対策課によると、肝属郡の女性は発熱や嘔吐(おうと)、下痢の症状、薩摩郡の女性は目まいや食欲低下、発熱の症状を訴え、それぞれ11日に入院。12日に陽性を確認した。いずれもかまれた跡は確認できず、マダニにいつ、どこで接触したかは不明。

**マダニは山林や草むら、やぶに多く生息する。春から夏にかけて活動が活発になり、人や動物にかみついて吸血する。SFTSは、ウイルスを保有するマダニにかまれて6日～2週間程度で発症する。致死率は約30%。**

県内では2023年、9例の感染報告があった。県感染症対策課は「草むらなどに入る時は長袖や長ズボン、足を完全に覆う靴を着用し予防してほしい。かまれた場合は、無理に引き抜かずに医療機関で除去して」と呼びかけている。